

國學院大學學術情報リポジトリ

連体修飾語を冠する和歌の類句「恋もするかな」の
成立と展開：他動詞「す」のヲ格賓語概念の多様化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000342

連体修飾語を冠する和歌の類句「恋もするかな」の成立と展開

―他動詞「す」のヲ格賓語概念の多様化―

中村幸弘

一、施注や取り立てに見る和歌の類句「恋もするかな」

例えば、新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小沢正夫・松田成穂校注／小学館・一九九四年）の四九〇番歌「夕月夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするかな」の頭注に、次のような記事を見る。

○（略）「恋もするかな」という形式は、四六九をはじめ、『古今集』に多い。

その注は、「いつともわかぬ恋もするかな」に頭注四として施されたもので、「いつという区別なく、人を恋い慕っている。」に続けて、そう述べていて、素直に理解できる表現ではあった。ただ、その「恋もするかな」という形式は、四六九をはじめ、『古今集』に多い。」だけが受けとめられてしまわれたとき、この日本語構文の適切な理解を誤らせてしまうことになりはしまいか、と、そう懸念されたのである。

その直後、これも、たまたま、まったく同じように懸念される事例に出会ってしまった。小町谷照彦『古今和歌集と歌こと

ば表現』(岩波書店・一九九四年)第一章『古今和歌集』の世界」第二節「恋歌の世界」において、『古今和歌集』恋歌の表現類型について、その代表的な語句を七語句群に分類している。その第一語句群として、「恋もするかな」が挙げられていたのである。もちろん、その「恋もするかな」の各該当用例を個々に確認した場合には、そのいづれについても連体修飾語が冠せられているのだが、和歌の類句として「恋もするかな」だけが取り立てられてしまうと、その表現の構文的な認識を誤らせることになるのではないか、と思えてならなかった。そのすべての「恋もするかな」の「恋」の上に連体修飾語が冠せられていることを、いつからともなく認識していたからである。

いま思い返すと、それは、形式動詞「す」の概念を常時確認しようとなめていたからであろうか。発見というには恥ずかしい、小さな気づきでしかないが、その「…恋もするかな」の「する」の概念を確認しようとした日があって、そこで、その形式動詞「する」が、以下のように読めてきたのである。

○郭公鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな
 (古今・11・四六九)

○五月山こずゑを高み郭公なく音空なる恋もするかな(古

今・12・五七九)

そのa「する」は、(物の区別もつかない情態で思い慕う)意を担っており、b「する」は、(泣く声もうつろな情態で思い慕う)意を担っていることになる。a「する」の賓語は「あやめも知らぬ恋(ヲ)」であり、b「する」の賓語は「なく音空なる恋(ヲ)」だからである。

そう感じて、『古今和歌集』のなかの該当用例としての残る四用例について確認した結果としてもそうであった。念のため、『後撰和歌集』のなかの該当用例四用例についても、併せて確認してみたが、違例を見ることはなかった。それだけのことである。一方で、『万葉集』歌に見られる、述語直上に主語を取って配する表現について、その追跡をしているなかで、同じく連体修飾語を冠した「恋」が、主語「我は」を挟んで「連体修飾語+恋も+我は+するかも」という、これも類句といってよいかと思われる表現を構築していたのである。さらにその類句は、「連体修飾語+恋をも+我は+するかも」というように格助詞「を」を表出した用例ともなっていたのである。

それらとはまったく別の視点から、「恋ふ」という動詞については、その一群の「釣る」「嘆く」「宿る」「別る」などと

もに注目している現象があった。それら動詞が存在する一方で、サ行変格活用動詞「す」を添えても表現していたからである。「恋ふ」を用いている一方で、「恋ひす」ともいつていたからである。ただ、その「恋ひ」を完全に名詞化させて、例えば、「恋をす」などというように、格助詞「を」を表出した用例や、連体修飾語を冠することなく「恋もす」などというように係助詞などを添えた、完全に名詞化しした「恋」を動詞「す」の賓語とする用例を、『万葉集』、そして、『古今和歌集』『後撰和歌集』には見ることがなかったのである。

多様で複雑な〈思い慕う〉精神行為が、動詞「恋ふ」に連用修飾語を配した表現形式ではない形式の開拓を迫ったのであるうか。類句「連体修飾語＋恋もするかな」の成立によって、その多様で複雑な〈思い慕う〉精神行為の表現が可能となった。それは、その動詞「する」の賓語の多様化複雑化であり、拡大化であり、深化であった。そして、動詞「す」には、その賓語を受け止めて、その概念を担いきる確かな機能があったのである。

小稿執筆に先立って、『万葉集』、そして、『古今和歌集』までは、この「連体修飾語＋恋もするかな」や、それに先行する「連体修飾語＋恋も＋我は＋するかも」など以外、〈連体修

飾語＋名詞〉が動詞「す」の賓語となる用例が見られないことを確認した。そのうえで、小稿は、和歌の類句「連体修飾語＋恋もするかな」の成立と展開とを辿るなかでの、動詞「す」の賓語の多様化の観察を目的とする報告となった。各用例資料は、すべて、新日本古典文学大系本に拠ることとした。

二、『万葉集』歌に見る先行形態「連体修飾語＋恋も我はするかも」

和歌の類句「…恋もするかな」の先行形態については、夙に指摘されていて、追って、その関係論考にも触れることもなるが、本章においては、その原初形態に近づけるよう観察した結果の報告から入っていくこととする。「…やめば継がる恋もするかも」（万葉・3・三七三）は、終助詞「かな」がその前身「かも」となっているだけで、類句「恋もするかな」に最も近づいている形態用例である。「…消ぬべき恋も我はするかも」（万葉・10・二二九二）は、一首の述語「する」の直上に主語「我は」が詠み込まれている形態用例である。「…かかる恋をも我はするかも」（万葉・11・二四一一）は、その述語「する」の直上に主語「我は」が詠み込まれているうえに、「する」

の賓語が「かかる恋をも」となっていて、格助詞「を」を表出している形態用例となっている。

右の二用例の、「する」の賓語に注目したとき、前二用例の賓語には、その格助詞「を」が表出されていらないことになるが、その格助詞「を」の表出・非表出について、どちらが先行するかなどの判断は、現段階では見送らざるを得ないと思っている。一般的な傾向としては、非表出から表出へと推移してきているようだが、この表現形態に限っていうと、格助詞「を」を表出している用例のすべてが、主語「我は」を詠み込んでいて、この形態のほうが原初形態かと感じとれたからである。さらにいえば、その該当用例数も併せ考えた結果でもある。

- (1) 白たへの袖をはつはつ見しからにかかる恋をも我はする
 かも (万葉・11・二四一一)
- (2) 志賀の海人の火気焼きてて焼く塩の辛き恋をも我はする
 かも (万葉・11・二七四二二)
- (3) 志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも我はする
 かも (万葉・15・三六五二二)
- (4) 須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも
 (万葉・17・三九三二二)

もつとも、右の用例(2)・(3)・(4)は、いわゆる類歌であり、地名が変わったり、どんな塩の焼き方をするかの描写を変えたりで、結局は一首だともいえよう。そうではあっても、とにかく、この四首の「恋」の連体修飾語は、いずれも三音節である。

ここに、いま一首、表現形態としては、「…も…かも」による詠嘆の形態とはなっていないが、その他動詞「する」の賓語について格助詞「を」を表出して表現し、その「する」の直上に主語「我が」を詠み込んでいる用例が見られた。「…も…かも」を用いてはいないが、詠嘆の表現といつてよい一首であった。

- (5) はだすすき穂には咲き出ぬ恋をも我がする。ただ一目のみ
 見し人ゆゑに (万葉・10・二三三二一)

旋頭歌で、その第三句「恋を我がする」の「我がする」は、そこで切れる連体形止めである。句点を打って示したとおりである。

この類句「連体修飾語+恋もするかな」は、原初形態を追跡するなかで、その表現形態が連体修飾語を冠する「恋」が他動詞「する」の賓語であるという点だけでなく、次の若干のバリ

エーションも含めて、詠嘆表現である点についても注目しておかなければならなかったことに気づかされたのであった。その詠嘆表現は、「…も…か」によって構成されていた。そして、他動詞「する」の上に主語は見えない。しかし、その他動詞「する」の賓語には、格助詞「を」が確かに表出されていたのである。

(6) 驗^{しる}なき恋^をもする^をか。夕されば人の手まきて寝らむ兒ゆゑに(万葉・11・二五九九)

以上の用例について、改めて確認する以前から、この類句「連体修飾語+恋もするかも」の原初形態について、その他動詞「する」の賓語が格助詞「を」を表出していて、ヲ格の一般的傾向とは違うように受けとめられて、その事情について知りたい思いに駆られていた。この機会にと思って、その確認をしたところ、「連体修飾語+恋を+する」表現に限られて、連体修飾語のない「恋」がヲ格で他動詞「す」と結びつくことなどは、まったくなかったのである。「恋をす」はもちろん、「恋もす」も、『万葉集』歌には存在しなかったのである。小稿に取り組むに先立って、確認していたこと、既に前章・第一章において述べ

たところである。

「連体修飾語+恋をも我はするかも」など、「連体修飾語+恋をする」は、当代にあつては、極めて特殊な表現形態として構築された表現だったはずである。その表現が普遍性あるものであったとしたら、その構造は、「連体修飾語付き名詞+を+する(詠嘆表現)」と認識されなければならないからである。そして、とにかく、当代、その「連体修飾語付き名詞+を+する」に相当する表現は、「連体修飾語+恋をする」以外に他の表現をまったく見ることがないのである。

三、「恋ふ」と「恋ひす」と、上代には存在しなかった「恋をす」となど

上代語の律文『万葉集』歌には、ハ行上二段に活用する動詞「恋ふ」が頻用されている一方に、その連用形「恋ひ」にサ行変格活用動詞「す」を添えた「恋ひす」という用例も存在して、その取り扱いに悩まされた時期があつた。まず、その「恋ひす」について、一単語の複合動詞として認定してよいのか、それとも、「恋ひ」と「す」との二単語に切り離して取り扱わなければならないのか、という疑問である。さらに、仮に一単語と見

たとしても、その「恋ひす」の「恋ひ」は単なる動詞連用形であるのか、それとも、一旦名詞化した「恋ひ」がサ行変格活用動詞「す」を伴った「恋す」の「恋」であるのか、という疑問である。いずれにしても、それは、サ行変格活用の複合動詞であるが、そのコヒスについては、教材化に際してなどは、表記についてまで悩まされるのである。

『万葉集』歌の「恋ふ」は、二格によつてその行為の対象を示すこと³⁾で知られている。ヲ格も僅かは見られ、平安時代以降は、ヲ格となつていくというのが、「恋ふ」についての大方の認識である。その理由については、これも、広く、その「恋ふ」という行為の対象が眼前にないからなど見られたりしているが、とにかく動詞「恋ふ」の語義の変化によるものであったろう。

そのような二格・ヲ格の「恋ふ」の用例を見るなかに、サ行変格活用複合動詞「恋ひす」が存在するのである。そのコヒスについて、一般には「恋す」と表記するようだが、そして、それは、現代人の古典語文表記の慣行でしかないのだが、このように表記されているのは、その「恋」について、完全に名詞化したコヒと感じとるほうがむしろ多いであろう。加えて、そのコヒスを、現代語「恋する」と同一語と見ている辞典もあつたり

するからである。³⁾

○我のみやかく恋すらむかきつはたにつらふ妹はいかにあるらむ(万葉・10・一九八六)

○恋するに死にするものにあらませば我が身は千度死にかへらまし(万葉・11・二三九〇)

『万葉集』歌には、右二用例のほかに、11・二三七五番歌／12・二九三六番歌／13・三三五五番歌／13・三二六二番歌の四用例の、都合六用例のコヒスが存在するが、その六用例とも、そのコヒスは、動詞「恋ふ」の連用形「恋ひ」にサ行変格活用動詞「す」が直接した結果の「恋ひす」と見るのが適切だったのである。

『万葉集』歌には、一単語動詞の連用形にサ行変格活用動詞「す」が付いた複合動詞が十九異なり語存在する⁶⁾。そのうち、その動詞連用形が連用形名詞として用いられていない一群が九異なり語見られた。残る十異なり語は、その動詞連用形が連用形名詞として用いられている一群であつた。ただ、そのサ行変格活用動詞「す」を伴った用例については、その動詞連用形が連用形名詞化していると認められる用例は存在しなかつた。つ

まり、十九異なり語全用例とも、それぞれの連用形となっている動詞をサ行変格活用複合動詞にしているだけのものだったのである。

さきに引いた『万葉集』11・二三九〇番歌のコヒスルは、続く「死にする」の存在から見ても、「恋ふる」と同意の「恋ひする」であろうと感じとることができる。『万葉集』歌に見た、その十九異なり語は、やがて、中古の和歌に、時には散文にも見られる「離れす」「消えす」「朽ちす」「尽きす」「旧りす」などをも誘発することになるのである。

ここで、また重ねて確認しておきたいのは、『万葉集』歌には、「恋をす」という表現はなかった、ということである。非表出ヲ格の「恋（ヲ）す」も存在しなかったということである。本章においても、さきに確認済みであることを述べたところである。したがって、「連体修飾語付きの「恋」＋を。するかも」の「恋」や「を」や「する」と関連する当代の表現は、どこにもなかったのである。その「恋」は、連体修飾語付きの「恋」としてしか存在しなかったのである。

四、他動詞「す」の格助詞「を」表出賓語と主語・述語緊密の構文と

一般に和歌の類句とされる「恋もするかな」は、「連体修飾語＋恋もするかな」と認識されなければならない。いや、それは、「連体修飾語付きの「恋」＋も＋するかな」と改められなければならないことにもなる。

その先行形態を追跡して到達した原初形態は、「連体修飾語付きの「恋」＋をも＋我は^{あれ}＋するかも」であった。そこにおいて注目されたのは、他動詞「する」の賓語「連体修飾語付きの「恋」が格助詞「を」を表出した「連体修飾語付きの「恋」＋をも」であったことである。また、その他動詞「する」が述語として直上に主語「我は^{あれ}」を表現していたことである。本章においては、その二点について、当代の表現としてどう認識していなければならないか、その確認をしていきたいと思う。

他動詞「す」が格助詞「を」を表出した賓語を受ける表現は、当代、必ずしも一般的ではなかった。むしろ非表出ヲ格としてその賓語を受けるのが一般であった。以下、『万葉集』歌に見る他動詞「す」と、そのヲ格賓語との関係について、格助詞「を」

の表出・非表出の大勢を見ていくこととする。

名詞に動詞連用形を下接させた「朝漕ぎ」は、さらにサ行変格活用動詞「す」を下接させた「朝漕ぎす」となる用例を見せるが、その「朝漕ぎ」は、他動詞「す」の非表出ヲ格の賓語となっているものと読みとることができた。⁽⁸⁾当然、その「朝漕ぎ」は複合動詞化した連用形名詞ということになる。その類用例は、動詞連用形に動詞連用形を下接させた「浮き寝」にサ行変格活用動詞「す」が下接した一群をも加えると、実に四十九異なり用例に及び、延べ百十二用例が確認できた。そのように、他動詞「す」の非表出ヲ格の賓語が大量に存在するなか、格助詞「を」を表出する用例は、以下に限られるのである。

- …浮き寝を^せむと…(万葉・15・三六二七／長歌) など
- …門出を^すれば…(万葉・20・四二九八／長歌) など
- …国見を^すれば…(万葉・1・二／長歌)
- …丸寝を^すれば…(万葉・9・一七八七／長歌) など

この程度の用例で格助詞「を」表出の傾向を云々することはできないが、小さな偏りは見えるようである。以下、次のような用例を見る。

- …片恋を^すと…(万葉・12・三一) …片思ひを^せむ
(万葉・4・七一)
- …夜泣きを^しつつ…(万葉・12・二九四三) …夜鳴きを^せむ
- …つづ(万葉・19・四一七九)
- …偽りをよく^{する}人を…(万葉・12・二九四三)
- …足占をそ^せし…(万葉・4・七三六)
- …賢しらを^すと…(万葉・3・三四四)

それぞれに事情があるのかもしれないが、とにかく限られた用例数をしか見せなかった、他動詞「す」の格助詞「を」表出の賓語であった。そういうなか、第二章において紹介した、和歌の類句「連体修飾語付きの「恋」+もするかな」の原初形態といってよい「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は^する^かも」には、その格助詞「を」が表出されていたのである。そののとりの該当用例が四用例、若干のバリエーションを加えると、計六用例に、その格助詞「を」を表出した、他動詞「す」の賓語が見られたのである。

その原初形態「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は^する^かも」は、その述語「する」の直上に主語「我は^する^かも」が表出され

ていた。若干変形している(5)の10・二三―一番歌の、その主語は、「我が」となっていた。とにかく、その都合五用例には、主語と述語「する」とが緊密に結びついていたのである。確かに、それは、『万葉集』歌の構文上の特徴ではあった。以下に、その主語・述語緊密の表現のうち、述語がサ行変格活用動詞「す」である用例について確認しておきたい。

『万葉集』歌の主語と述語とは、極めて緊密な関係にあった。(9)その述語動詞は多様である。主語もまた多様であったが、特にその短歌の第五句に主語・述語が収まる例が多く見られたのである。「…舟」近付きぬ(万葉・3・二五〇)／「霞」たなびく(万葉・10・一八一五)などである。次いで、第四句末までが主語で、第五句が述語動詞となっている用例である。「…我は」恋ひつもあるか(万葉・4・六六六)／「…この」照る月は満ち欠けしける(万葉・3・四四二)などである。その極端な用例として、初句から第四句までが主語で、第五句が述語、という、「君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも」(万葉・7・一二四九)などまでが見られたのである。

そのなかに述語動詞がサ行変格活用動詞「す」となり、その直上に主語「我が」が位置する用例が見られたのである。その

用例は、当初は、「嘆く」で言い切る発想であった。その「嘆く」の上に例えば「我は」を詠み入れても五音節の字足らずである。そこで、「嘆く」について、補助動詞「す」と係助詞「ぞ」の協力を待って、「嘆きそする」と詠み改めて、その「する」の上に「我が」を詠み入れて、主語・述語緊密の第五句「嘆きそ我がする」として詠み収めたかと思えた用例である。その「する」は補助動詞ではあるが、直上の「我が」とは、主語・述語の関係である。

○心には思ひわたれどよしをなみよそのみにして嘆きそ我がする(万葉・4・七一四)

○…人の言しみ思ひそ我がする…(万葉・4・七八八)

○待ちかてに我がする月は…(万葉・6・九八七)

○…見まく欲り我はすれども…(万葉・9・一三九二)

そのように、直上に主語を置くサ行変格活用動詞「す」は、補助動詞用法のものだけでなく、他動詞「す」にも影響を及ぼしていった。

○…言繁み丸寝そ我がする…(万葉・10・二三〇五)

○…大和道の渡り瀬^せごとに手向けそ我がする^あ (万葉・12・三二八)

○…しかれども言挙げそ我がする^あ。事幸くま幸くませと… (万葉・13・三二五三／長歌)

以上に見たような主語述語緊密表現の傾向が、和歌の類句「連体修飾語付きの「恋」+を+するかな」の原初形態と見定めた「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+する^あかも」の、その「我は^あ」と「する」とを共起させる傾向にも影響していることは、容易に見てとることができるであろう。

五、他動詞「す」のヲ格賓語からの格助詞「を」の省略と主語・述語緊密表現からの主語「我は^あ」の省略と

和歌の類句「連体修飾語付きの「恋」+を+するかな」の原初形態として見定めた形態は、「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+^あする^あかも」であった。前章・第四章においては、その他動詞「する」の賓語に相当する「連体修飾語付きの「恋」+を^あ」の格助詞「を」が表出されていることについて注目し

たのであった。その格助詞「を」は、非表出でも、そのヲ格が示せたので、表出されていたことが注目されたのである。

その原初形態の「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+^あする^あかも」のなかで、いま一つの注目される点は、その「我は^あ」は主語であり、「するかも」が述語であって、そのように、主語・述語が緊密に結びついている点であった。述語動詞「する」の直上に「我が^あ」や「我は^あ」が位置する用例は、『万葉集』歌のなかに幾とおりが見られた。「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+^あする^あかも」の「我は^あするかも」も、その影響を受けて成立したことは明らかである。

和歌の類句「連体修飾語付きの「恋」+を+^あする^あかな」の原初形態「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+^あする^あかも」の背景には、さらにその構文の骨子ともいえる「…も…かも」という詠嘆の表現形式が存在した。その「…も…かも」という表現形式に、「連体修飾語付きの「恋」が格助詞「を」を表出して他動詞「す」の賓語として組み込まれた。そのようにして、「連体修飾語付きの「恋」+を+^あする^あかな」が、まず構築された。一方で、その「する」は、述語として主語「我は^あ」を要求して、その原初形態は完成したのであった。

ただ、その格助詞「を」の表出は、むしろ一般的ではなかつ

た。殊に、他動詞「す」については、その賓語を非表出ヲ格として受ける用例が圧倒的に多かった。そうではあっても、一旦表出されていた格助詞「を」であるので、次の二用例は、その格助詞「を」が省略されたものと見なければならぬことになる。この格助詞「を」の表出されている用例と表出されていない用例との先後関係については、ヲ格の表出・非表出の関係とは逆行することになって、その推移をそう読みとつてよいかどうか、なお不安を残している。とにかく、その二用例を引く。

- (7) 朝咲^{あした}き夕^{ゆふへ}は消^けぬる月草^{つづくさ}の消^けぬ^{べき}恋^{こひ}も我^{われ}は^{する}かも (万葉・10・二二九一)
- (8) ものふの八十^{やそ}字^ぢ治川^{かは}の速^{はや}き瀬^せに立^たち得^えぬ恋^{こひ}も我^{われ}は^{する}かも (万葉・11・三七四一)

そして、その「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+^{する}かも」形態から、さらに主語「我^{われ}は」も省略されて、「連体修飾語付きの「恋」+も+^{する}かも」という、『古今和歌集』に見る類句「連体修飾語付きの「恋」+も+^{する}かな」直前の形態となったのである。なお、この、主語「我^{われ}は」の省略は、

ちよとど、主語・述語緊密の表現が徐々に崩れてゆく趨勢とも並行していることになろうか。

- (9) 高座^{たかくら}の三笠^{みかさ}の山^{やま}に鳴^なく鳥^{とり}のやめば継^{つぎ}がるる恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・3・三七三)
- (10) をみなへし佐紀^{さき}沢^{さわ}に生^おふる花^{はな}かつみかつても知らぬ恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・4・六七五)
- (11) かほ鳥^{とり}の間なくしば鳴^なく春^{はる}の野^のの草根^{くさね}の繁^{さか}き恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・10・一八九八)
- (12) 言^{こと}に出^でて言^{こと}はばゆゆしみ朝顔^{あさがお}のほには咲^さき出^でぬ恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・10・二二七五)
- (13) この山の峰^{みね}近^かしと我^{われ}が見^みつる月^{つき}の空^{そら}なる恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・11・二六三七)
- (14) 君^{きみ}が着^きる三笠^{みかさ}の山^{やま}に居^ゐる雲^{うみ}の立^たてば継^{つぎ}がるる恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・11・二六七五)
- (15) 庭清^{にわきよ}み沖^{おき}へ漕^こぎ出^でづる海人^{うみ}舟^{ふね}の梶^{かぢ}取る間^まなき恋^{こひ}も^{する}かも (万葉・11・二七四六)

ここに至つて、あるいは、この類句の原初形態「連体修飾語付きの「恋」+をも+我^{われ}は+^{する}かも」の格助詞「を」の表

出は、他動詞「する」の賓語を確かに受けとめようとする意識が、その格助詞「を」を要求したのではないか、などとも思えてきた。その格助詞「を」が消え、主語の「我は」までが消えてしまったということは、他動詞「する」に、その具体的な概念を求めようとしなくなってきたのではないか、と思えてもきたのである。

六、八代集恋歌に定着した和歌の類句「恋もするかな」

テキストや論考のなかで、この「連体修飾語付きの「恋」も＋するかな」について、和歌の類句「恋もするかな」といつてしまっているのは、どのような意識がそういわせているのであろうか。そこに不満を覚えたところから出発した小稿であった。読解の手掛かりを捉えて提供する作業を生業としている筆者には、その類句といわれる「恋もするかな」が、すべて連体修飾語を冠していることを、まず認識させなければならぬと思ったのである。次に、他動詞「する」については、直ちにその賓語が確認されなければ、その動詞「する」の概念が読みとれないであろうと思ったのである。

ところが、『古今和歌集』歌から始めて、八代集恋歌に見る、

その類句「恋もするかな」を改めて見たとき、その表現については、連体修飾語を冠することで〈思い慕う〉行為の詠嘆表現が完結する終助詞的なものとも感じとられていたのではないかと、思えてきたのである。和歌の類句「恋もするかな」として取り扱う大方の姿勢も、理解できなくはない、と思えてきたのである。

『古今和歌集』歌の、その類句「恋もするかな」の連体修飾語部分については、『万葉集』歌の、その先行形態の諸用例のそれとを併せ観察した結果の施注など、極めてしばしば見えてきているところである。田中常正『万葉集より古今集へ―古今集恋歌の読人知らずの歌の構成―』（笠間書院・昭和六十二年）の一の(一)「古今集卷第十一恋歌一の読人知らずの歌と万葉集先行歌」は、小稿の前章・第五章に紹介した(9)から(15)までの『万葉集』歌七首を引いて、『古今和歌集』に見られた六首の類句「恋もするかな」歌の連体修飾語部分に見られる模倣追隨の手法について述べている。小稿は、その類句「恋もするかな」の先行形態を追跡し、原初形態がどう構築されたか、また、その事情をどう理解したらよいかなどを目的とするものだが、併せて、八代集和歌のうちの類句「恋もするかな」歌の理解に資することができた幸せである。

以下に、八代集和歌に見る、その該当用例を引くこととする。

- (16) ほと、ぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋も
[する] 哉 (古今・11・四六九)
- (17) ゆふづく夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋も
[する] かな (古今・11・四九〇)
- (18) わが園の梅の末枝に鶯の音になきぬべき恋も [する] 哉 (古今・11・四九八)
- (19) 夜ひの間もはかなく見ゆる夏虫にまどひまされる恋も
[する] 哉 (古今・12・五六二)
- (20) 河の瀬になびく玉藻のながれて人に知られぬ恋も [する] 哉 (古今・12・五六五)
- (21) 五月山こずゑを高めほととぎす鳴くねそらなる恋も [する] 哉 (古今・12・五七九)
- (22) 春の池の玉藻に 遊鳩鳥の脚のいとなき恋も [する] 哉 (後撰・2・七二)
- (23) 玉の緒の絶えてみじかき命もて年月ながき恋も [する] かな (後撰・10・六四六)
- (24) 白浪の寄する磯間を漕ぐ舟のかちとりあへぬ恋も [する] 哉 (後撰・10・六七〇)

- (25) 逢事の夜々を隔つる呉竹の節の数なき恋も [する] 哉 (後撰・10・六七三)
- (26) 照る月も影水底にうつりけり似たる物なき恋も [する] かな (拾遺・13・七九一)
- (27) 刈りて干す淀の真菰の雨降ればつかねもあへぬ恋も [する] 哉 (拾遺・13・八二四)
- (28) 涙川袖のるせきも朽ちはてて淀むかたなき恋も [する] かな (金葉・7・三七七)
- (29) ひとめ見し人はたれとも白雲のうはの空なる恋も [する] かな (千載・11・六四七)
- (30) 雲井よりとほ山鳥のなきてゆく声ほのかなる恋も [する] かな (新古今・15・一四一五)
- 以上十五首の類句「恋もするかな」歌を、八代集に見る。その多様さは、どちらかというとネガティブな方向に向けての奇抜さを競うものが多かった、といえようか。そして、その述語動詞「する」の上の主語「我は」を、なお残しているものもあった。

- (31) たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草のうきたる恋も我は [する]

哉 (古今・12・五九二)

(32) うち^(う)はへて音^(おと)をなきくらす空蟬^(うつせみ)のむなしき恋も我はする

哉 (後撰・4・一九二)

(33) 玉津島^(ふか)深き入江を漕ぐ舟のうきたる恋も我はする 哉 (後撰・11・七六八)

述語「するかな」の直上に主語「我は」を残したその三首は、その「する」の概念が、それぞれの賓語から、心なしか感じとれてくる。それは、その「恋」の連体修飾語が、意外なほどに単純であることも関係しているようか。途端に主語「我は」のないう十五首の「恋」の連体修飾語が複雑であるかに見えてきた。もはや、その類句「恋もするかな」は、一単語の終助詞にしか見えなくなってきたようである。

七、和歌の類句「恋もするかな」の構文としての特

殊性

和歌の類句「恋もするかな」の構文としての特殊性について改めて本章において、徹底して確認していきたい。その原初形態から確認していきたい。その確認を通して、その原初形態を

生み出した先人の表現構築能力の偉大さに敬意を表したい。その先人は、形式動詞「す」のはたらきを最大限發揮させた天才であった。

和歌の類句「恋もするかな」は、いま、連体修飾語を必須とするというように認識されるが、本来は、連体修飾語を冠した「恋」という名詞を、他動詞「する」のヲ格賓語として配することができるとに気づいたことから始まった。それがヲ格賓語であることを明確にさせようとして、そこに格助詞「を」が表出された。当代の傾向でもあったが、その述語動詞となったサ行変格活用動詞「す」は、その直上に主語「我は」を要求した。以上の「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+す」を、あらかじめ待機していた詠嘆の表現形式「…も…かも」に組み込むことになった。以上が連体修飾語を必須とする類句「恋もするかな」の原初形態「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+するかも」の成立であった。

これまでに、「…も…かも」という詠嘆の表現形式といってきたが、あるいは、その「も」は、「連体修飾語付きの「恋」+を+我は+するかも」の「を」から考えると、その「も」は、添加の意ぐらいであったかもしれない。そうであったとしても、「ここだも鳴く鳥の声かも」(万葉・

6・九二四／「辛くもここに別れするかも」（万葉・15・三六九五）／「あしびの花も咲きにけるかも」（万葉・20・四五一一）などが見られ、中古に入ると、「射るがごとくも思はゆるかな」（古今・2・一二七）／「秋月ふかくもなりける哉」（古今・5・二六七）／「いやはかなにもなりまさる哉」（古今・13・六四四）／「うら山しくも帰る浪哉」（後撰・19・一三五二）など、いっそう頻用されている。そこで、「連体修飾語付きの「恋」+も+するかな」も、その一群に所属させて見ていくことになるのであろう。

ここで、この原初形態「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+「する」かも」について、いっそうの抽象化を試みることにしよう。そもそも、例えば「辛き恋をも我はするかも」（万葉・11・二七四二）／15・三六五二／17・三九三二を抽象化した結果が、その「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+「する」かも」であった。この段階で、なお具象的な概念を担っている単語は、もはや、「恋」しか残っていない。その「恋」を抽象化して捉えたと「名詞」ということになる。「名詞」といつても、複合名詞もあるし、漢語もあるしで、多様である。そこで、「恋」が和語であるところから、和語名詞といって捉えることもできよう。また、「恋」が動詞「恋ふ」の連用形が名詞

化した連用形から転成したものであるところから、連用形名詞といって捉えることもできよう。

和語名詞として、例えば、「旅」を想定してみよう。その「旅」を用いて、「遠き国経巡る旅をも我はするかも」と詠まれているように。すると、その表現は、「連体修飾語付きの「旅」+をも+我は+「する」かも」というように、ひとまず抽象化して捉えられよう。連用形名詞として、例えば、「狩」を想定してみよう。その「狩」を用いて、「獣追ふ狩をも我はするかも」と詠まれていたとしよう。すると、その表現は、「連体修飾語付きの「狩」+をも+我は+「する」かも」というように、これまた、ひとまず、抽象化して捉えることができる。小稿が、類句「恋もするかな」の原初形態として捉えた「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+「する」かも」も、そのような段階の捉え方であったわけである。

そこで、いっそう抽象化した捉え方をすると、それらは、すべて、「連体修飾語付きの名詞+をも+我は+「する」かも」というように括ることができるであろう。その「連体修飾語付きの名詞+をも+我は+「する」かも」に相当する用例が、「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+「する」かも」以外に存在したら、「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+「する」かも」表現は孤

例ではなくなるのだが、残念ながら、その存在を認めることはできなかった。「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+するかも」表現は、一定の用例数を見せているが、その構造を同じくする他の表現、例えば「遠き国経巡る旅をも我はするかも」「猷追ふ狩をも我はするかも」などは、当代文献にまったく存在しなかったのである。「連体修飾語付きの「恋」+をも+我は+するかも」表現は、構文のうえからは、孤例といつてよい、特殊な存在だったのである。

和歌の類句として頻用された「恋もするかな」は、現代の方の認識からも、連体修飾語を必須とするものではあったとしても、「連体修飾語付きの「恋」」が、その「する」のヲ格賓語として読みとられていたかどうかは、危ぶまれるところである。そして、その連体修飾語を冠した「恋もするかな」も、当代文献のなかでは、極めて特殊な構文の表現であった。その「連体修飾語付きの「恋」+も+するかな」の「恋」が、他の名詞となつて表現された用例は、次章・第八章において報告する『後撰和歌集』歌に見た一用例に限られたのである。

八、和歌の類句「恋もするかな」の後世の表現に与えた影響

前章・第七章の末尾において触れてしまった、「連体修飾語付きの「恋」+も+するかな」の影響を受けたただ一用例といった、その紹介から入っていくことにしよう。そうはいっても、その「連体修飾語付きの名詞+も+するかな」どおりにはなリエていなかった。その名詞は二音節でなければならないのだが、あいにくと、そこに選定された名詞は三音節であった。律文の宿命で、止むなく、詠嘆の表現を構成する「…も…かな」の「も」が犠牲となった。

○あひおもはでうつろふ色を見る物を花に知られぬがめ
〔ヲ〕する哉かゝ（後撰・2・五九／凡河内躬恒）

しかし、右の一用例は、その後の他動詞「す」のヲ格賓語の概念を一気に拡大化・多様化することになった。

○たむけせぬ別れ〔ヲ〕する身のわびしさは人目を旅と思

ふなりけり（後撰・11・七〇四）

○暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れ〔ヲ〕せ

ましや（後撰・12・八六二／拾遺・12・七一五〈重出〉）

○百くさに八十くさ添へて賜ひてし乳房の報い〔ヲ〕今日ぞ

我がする（拾遺・20・一三四七）

「乳房の」は（母上の乳房に対する）意で、連用形名詞「報い」の連体修飾語である。「百くさに八十くさ添へて賜ひてし」は、その「乳房の報い」にかかつていく連体修飾語である。連体修飾の二重構造である。その「百くさに八十添へて賜ひてし乳房の報い」が、非表出のヲ格として歌末の他動詞「する」の賓語となっている。

○世の常に思ふ別れの旅ならば心見えなる手向け〔ヲ〕せ

ましや（後拾遺・8・四六七）

○岸とほみただよふ波は中空に寄るかたもなきなげきをぞ

せし（後拾遺・15・八七四）

右のヲ格賓語は、格助詞「を」を表出している。その「を」は、併せて下に係助詞「ぞ」を伴っている。この傾向は、以下にも

見ることになる。

○嵐をや葉守の神もたたるらん月に紅葉のたむけ〔ヲ〕し

つれば（金葉・3・二二七）

○けふくれば麻の立枝に木綿かけて夏みな月のみそぎをぞ

する（千載・4・二二三）

○思ひきや櫺の端書きかきあつめ百夜も同じまろ寝〔ヲ〕せ

むとは（千載・12・七七九）

右のヲ格非表出賓語は、連体修飾語「百夜も同じ」付きの複合名詞「まろ寝」である。

○かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる嘆き〔ヲ〕せ

せむとは（千載・13・七九九）

○渚なる片割れ舟の埋もれて引く人もなき嘆き〔ヲ〕すと

：（千載・18・一一六〇／長歌）

○契りしにあらざるのとる浜千鳥跡だに見せぬ恨みをぞする

（千載・15・九五〇）

○唐国に沈みし人もわがごとく三代まで逢はぬ嘆きをぞせし（千載・16・一〇三五）

○花にあかぬ嘆き「ヲ」はいつもせしかども今日のこよひ
ににる時はなし (新古今・2・一〇五)

この用例の非表出の「ヲ」を格助詞「を」として表出すると、
下の係助詞「は」は、「ば」というように濁音化する。その「は」
の背後にヲ格が読みとれる、といってもよい。

○桜^{さくら}ちる春の末^{すま}にはなりにけり雨間^{あま}もしらぬながめ「ヲ」
せしまに (新古今・8・七五九)

○なき名^なのみ立田^{たちだ}の山にたつ雲のゆくへも知らぬながめをぞ
する (新古今・12・一一三三)

○袖^{つゆ}の露^{つゆ}あらぬ色にぞ消えかへるうづれば^{かは}変るなげき「ヲ」

せしまに (新古今・14・一一三三)

○わたつ海^{うみ}のふかきに沈^{しづ}むいさり「ヲ」せでたもつかひあ
るのりを求めよ (新古今・20・一九六一)

以上に見たような「連体修飾語付きの連用形名詞+を(また
は「ヲ」)+「す」構文の表現を、『万葉集』歌や『古今和歌集』
歌のなかに見ることはできなかった。凡河内躬恒の、『後撰和
歌集』収載の「花に知られぬながめする哉」は、「連体修飾語

付きの「恋」+をも+我は+するかも」などから、いち早く、
「連体修飾語付きの連用形名詞+「ヲ」+するかな」という構
文を読みとった結果として詠出されたものである。連体修飾語
を冠した名詞を、他動詞「す」のヲ格賓語として詠みおこせた
歌人たちも、深層において、「連体修飾語付きの「恋」+も+
するかな」から「連体修飾語付きの名詞+「ヲ」+す」を抽
出して、それぞれの表現を構築していたものと解したい。

注

(1) 山田孝雄『日本文法論』(宝文館・明治四十一年) 本論第一部「語論」
第三章「語の性質」第二「用言」四「形式用言」において、形式用言
の概念を担当している語を「賓語」と呼んでいる。その形式用言「す」
については、「この用言の賓語たるものは体言及体言の資格を得たる
用言及び副詞の一部なり。」といっている。同書の索引によると、「賓
語」という、この術語が一一〇回用いられていることになるが、連体
修飾語を必須とする体言に特定しての論述を見ることはなかった。な
お、さきごろ、発表の機会を得た拙論「連体修飾語を必須とする」「さ
ま」「心地」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」について
『國學院雑誌』第一一七巻第九号・平成二十八年九月) においても、
そこに共通する構文上の特徴が存在した。

(2) その『古今和歌集』『後撰和歌集』以下、『新古今和歌集』までの八代
集を通して連体修飾語を冠することのない「恋もするかな」は見当

たらなかったが、『大和物語』十九段に「世を経れど恋も^{せぬ}身の夕さればすずろにもの悲しきやなど」が見られた。

(3) 格助詞のうち、主格やヲ格については、表出されない場合もあって、その現象を、筆者は、表出・非表出と呼んで取り扱うことにしている。極めて感覚的な認識だが、主格はもちろん、ヲ格も、古くは非表出が多く、徐々に表出されるようになってきたと感じている。

(4) いわゆる動詞の格支配現象である。特に「背く」「恐る」などが注目されているが「恋ふ」についても、例えば『古語大辞典』（小学館・昭和五十八年）「こふ」【恋ふ】の語誌（井手至執筆）には、上代語の「恋ふ」は、「…を恋ふ」ではなく、「…に恋ふ」が一般的であったとの指摘がある。

(5) 『日本国語大辞典 第二版 第七卷（小学館・二〇〇一年）』は、現代語形で立項するので、「こいする」【恋】という立項形で、語釈が（恋をする。恋い慕う。）となっていた。その「恋をする」が、このコヒスの理解に誤解を与える恐れを感じるのである。

(6) 一単語動詞の連用形にサ行変格活用動詞「す」が直接した複合動詞の実態については、拙稿『万葉集』歌の動詞「す」について――十五の観察視点――（國學院大学栃木短期大学紀要（第五十号））・平成二十八年）における調査結果を採用する。「あさりす」「漁りす」「潜きす」「枯れす」「死にす」「絶えず」「生えず」「枯れす」「忘れす」の前項動詞連用形部分「あさり」「漁り」「潜き」「枯れ」「死に」「絶え」「生え」「欲り」「忘れ」は、連用形名詞の用例を見ることがない。「過ちす」「慮す」「狩す」「恋す」「釣す」「嘆きす」「みそぎす」「紅葉す」「宿りす」「別れす」の前項動詞連用形部分「過ち」「慮」「狩」「恋」「釣」「嘆き」「みそぎ」「紅葉」「宿り」「別れ」については、連用形名詞の用例を見せるが、しかし、これら複合動詞前項の動詞連用形は、連用形名詞化してはいない。その前項の動詞連用形の下にヲ格

を認めて読むことができる用例を確認することができないからである。以上の結果を借りて、いま「慮りす」「狩りす」「恋ひす」「釣りす」「紅葉ちす」など表記すること、それら動詞連用形が名詞化してないことを表記のうえでも示したいと思っている。

(7) 古く、拙稿「補助動詞「す」の論」（『國學院雜誌』第七十五卷第七号・昭和四十九年）においても触れたところである。

(8) 複合語化した連用形名詞に直接するサ行変格活用動詞「す」が他動詞「す」であり、その上に位置する複合語化した連用形名詞が非表出ヲ格の賓語であることについても、『万葉集』歌の動詞「す」について――十五の観察視点――（前出）の調査結果を採用する。具体的には、その「朝漕ぎす」以下、「朝立ちす」「朝なきす」「朝開きす」「足ずりす」「網引す」「磯廻す」「家出す」「家居す」「末枯れす」「浦廻す」「面隠しす」「面変はりす」「風祭りす」「国求きす」「国見す」「国別れす」「言挙げす」「言答めす」「言問ひす」「事計りす」「鳥廻す」「霜曇りす」「旅宿りす」「手向けす」「妻恋す」「妻問ひす」「鳥狩す」「侍宿す」「鼻ひす」「船出す」「船乗りす」「船泊てす」「丸寝す」「宮仕へす」「水脈引きす」「物語す」「雪消す」「旅寝す」「旅行きす」「宮出す」「物思ひす」（係助詞・副助詞介在）の四十二異なり語と、「浮き寝す」以下、「顧みす」「恋結びす」「立ち走りす」「落ち欠けす」「わび鳴きす」「酔ひ泣きす」の七異なり語とが検出され、計四十九異なり語の存在が確認された。

(9) 拙稿『万葉歌の構文――主語・述語緊密の関係――』（『國學院雜誌』第一一―一巻第五号・平成二十二年）の調査結果の一部を採用する。